帯広畜産大学同窓会報

第11号　平成16年8月 帯広市稲田町西2線11番地帯広畜産大学内 帯広畜産大学 同窓会事務局発行

第11号発刊によせて

同窓会会長　高田　薫（S31　総農）

会員の皆様には、ご健勝にてご活躍のこととお慶び申し上げます。

さて、この4月から母校帯広畜産大学は、「国立大学法人帯広畜産大学」として新たな出発となりました。鈴木学長先生は、この法人化を「個性輝く専門店単科大学」への好機ととらえ、獣医・農畜産学融合分野における世界レベルの中核的拠点構築に向けて全学一丸となって取り組みたいと決意を表明されております。

又、大学はこれからの役割に「社会貢献」を掲げ、従来からの地域共同研究センターに加えて「地域貢献推進室」と情報発進に「広報室」を新設するなど、その実践に努められております。

同窓会のこの一年を顧み、支部活動を含め活動の様子をお伝えします。

平成15年9月に、新しく北海道オホーツク支部が誕生しました。当支部管内は、北海道の代表的な酪農畑作地帯ですが、国立大学の法人化やBSEの問題を契機に、同窓の方々の母校への関心と期待が高まり支部の結成となりました。

島根県支部では、同県出身の初代学長故・宮脇富先生の顕彰事業をすすめられ、記念の顕彰碑も立派に建立（平成16年5月）されました。この事業に参加協力されました方々に感謝と敬意を表する次第です。

北海道釧路支部では、会員の日野浦正志さん（S44年草地卒）が釧路管内鶴居村村長選挙に支部の推薦も受け立候補し当選されました。新しい村づくりにご活躍を期待しております。

母校は、文部科学省が世界最高水準の研究拠点の形成を目指した「21世紀COEプログラム」に、道内大学では北海道大学とともに選ばれましたが、この3月に札幌で北大と共催で中間報告会がありました。帯広畜産大学の研究は「動物性蛋白質資源の生産性向上と食の安全確保・特に原虫病の研究を中心として」ですが、この報告会には同窓会札幌支部の方々のご参加を得ました。このあと帯広畜産大学を会場に地元の方々を対象にシンポジウムを持たれましたが、この研究事業への関心の高さとともに大学への強い期待が感じられました。

母校が目指す新しい道は、平坦ではなく、極めて厳しい道であると感じています。同窓会は、母校の発展・充実を期し総力をあげて取り組みたいと思います。会員の皆様の一層のご指導ご支援をお願いいたしますとともに、ご健勝とご発展を心から祈念いたします。

学長からのメッセージ

帯広畜産大学長　鈴木　直義（S30　獣医）

「帯広畜産大学」は、2004年4月1日、「国立大学法人帯広畜産大学」が設立する大学として新たに出発いたしました。地方の小規模大学としては、文字どおり試練の始まりでありますが、私は本学初代学長として、この法人化を「個性輝く専門店単科大学」への絶好の機会であると受け止めております。

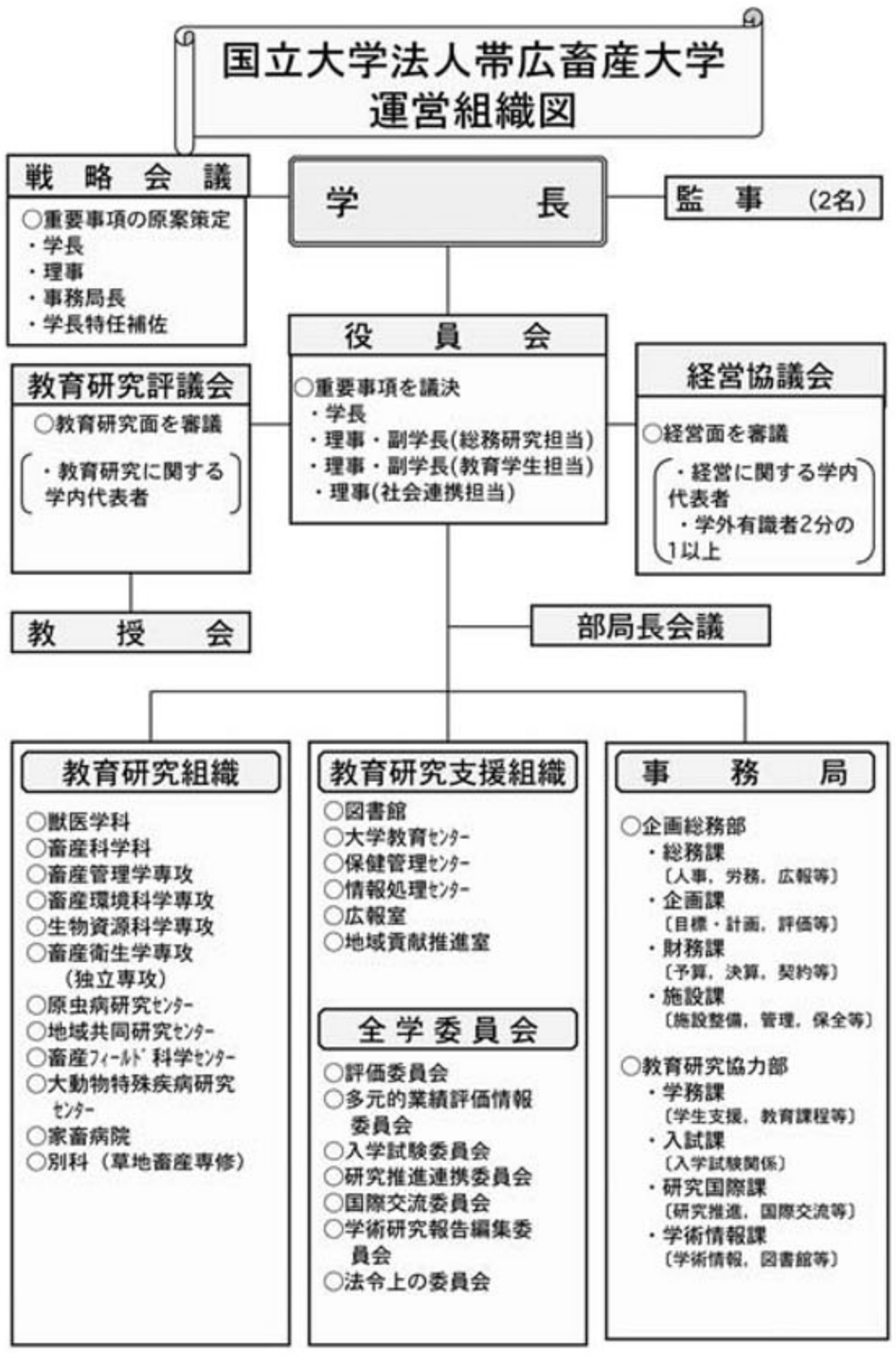
今後は第三者の評価に基づく競争原理の下、大学運営・経営について学長のリーダーシップの発揮と結果責任が強く求められておりますが、本学の「中期目標、中期計画」あるいは「年度計画」に基づき、獣医・農畜産学融合分野における、世界レベルの中核的拠点構築に向け全学一丸となって頑張る決意であります。

帯広畜産大学では、役員会、経営協議会、教育研究評議会が中心となって自主的、自律的な大学運営・経営を行っていきますが、円滑な運営・経営を行うためには、教育研究現場で活躍する教職員と学長あるいは大学執行部との意思の疎通が一層重要であることから、新たに部局長（教育研究組織等の長）会議を設けて各部局構成員の意見を汲み上げる場あるいは部局活性化の役割を果たすことを期待しております。

今日、大学の使命であります教育（優れた人材養成）と研究（秀でた基礎研究）水準の向上に加えて社会貢献が強く求められており、大学は積極的に社会貢献に関わるべきであります。そのため、本学では研究面での地域貢献組織である地域共同研究センターに加えて、新たに生涯学習関係事業促進のための全学組織として、教育担当理事を責任者とする「地域貢献推進室」を設置するとともに、広く社会、国民に大学改革の現状等を積極的に情報発信するために、総務担当理事を責任者とする「広報室」を設置しました。

ところで、帯広畜産大学は1941年に創設された帯広高等獣医学校から数えて60年余の歴史を有し、その間の時代と社会の変化や学術の進展に対応した不断の改革により、今日の発展を見ております。この21世紀に更なる発展を実現するためには、大学自身の努力はもとより、地域社会、産業界、国民各層の幅広い理解と支援が不可欠であります。ついては、関係各位の一層のご支援とご指導をお願い申し上げるものであります。

以下に新生帯広畜産大学の組織図をご案内致します。



「大学の責任　その３」

理事・副学長（総務担当）　長澤　秀行（S53　獣医）

本年４月より国立大学法人帯広畜産大学の理事を拝命しました。前号および前々号にて、「大学の責任」について述べさせていただきましたが、今後は私本人の責任をしっかり認識しなければと気を引き締めています。

なぜ、国立大学を法人化することにしたのかというと、これまで国立大学は文部科学省の内部組織であったため、学問の自由、大学の自治と言いながら、新しい取組をしようとすると、いろいろと不都合なところがありました。法人化によって、これまでの「事前審査」から「事後評価」へと大きくシステムが変わり、いろいろなことが大学で決められるようになったと同時に、社会から評価を受けることになりました。これまで以上に、大学が自己責任の重さをきちんと認識し、積極的に情報を発信し、国民の理解と信頼を得られるような国立大学になっていくことが必要です。

国立大学が法人化されたことを多くの人たちが独立行政法人に変わったと誤解されていますが、正しくは国立大学法人です。国立大学の役割は、高等教育、学術研究水準の向上、研究者養成、高度職業専門人養成などです。従って、法人化後も独立採算制にはならず、国から引き続き必要な財政措置を受けますので、国立大学の法人化は「民営化」とは全く異なるものです。

とはいいながら、国からの財政措置（運営費交付金と言います）が年々減少することは確定していますので、本学のように地方にある小規模な国立大学は、法人化すると衰退してしまうのではないかと危惧されています。一般的には、都心部の大規模大学に比べて地理的な面や、自己収入の増額には不利であると思われます。しかし、小規模大学であれば大学全体が一丸となって社会の要請に素早く対応しやすいという利点もあります。学部間の綱引きや役員会と教職員との距離が大きいといった他大学に見られる問題点も心配ありません。地方大学であれば地域と連携しながら、その地域の特色を活かした研究を行えるなどといった有利な点もあります。した

がって、本学は法人化を機にその個性をより発揮できるようになると確信します。

4月に法人化され、組織は変わり、大学運営を決定するシステムも変わりましたが、大学構成員の意識変革はこれからです。学生中心である大学ですから、教育体制を維持するためには、法人化されたからといってガラリと体制を変える事はできません。しかし、社会が大学に何を求めているのかということを充分に把握し、目で見える形の大学改革を推進する所存です。社会から「帯広畜産大学は国立大学の責任を果たしている」と高く評価されるように、私自身も責任を果たしたいと思います。同窓の皆様におかれましては、変わらぬご支援をいただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

法人化後の本学の教育組織

理事・副学長（教育・学生担当） 石橋　憲一（S42　農化）

同窓の皆様も既に新聞等でご存じのように、すべての国立大学はこの4月から法人化されました。各大学は今後6年間の目標・計画（中期目標・計画）を立てて、これらの達成のために邁進することになります。また、単年度ごとに大学の計画の達成度を自己点検・評価することになりますが、6年後には第三者機関（大学評価・学位授与機構）による外部評価を受け、高い評価が得られなければ大学予算（運営費交付金)が削減されることになります。したがって、本学では目標・計画の達成のために最大限の努力をするのは当然ですが、他省庁など外部から大型研究費を獲得すべく検討を進めているところです。本学の中期目標・計画には教育・研究の質の向上に加え、社会貢献や国際交流も掲げております。その一環として、今年度は国際協力機構（JICA）の協力を受け、「開発途上国への援助戦略と畜産技術協力」と題する特別講義を12回、大学院・学部生などに開講することになりました。さらに、国内・外の実習なども予定しております。学生諸君には、これらの講義・実習を通して国際的感覚を身につけてもらえればと思っております。

教育研究組織として、本年4月から動物由来食品の安全性評価と生産から加工・流通にいたる衛生管理について多元的視点で捉えることを目標として、大学院修士課程に獣医・畜産融合分野による「畜産衛生学独立専攻」をスタートしました。「21世紀の食の安全と安心」を主要テーマとする本専攻では、食肉乳衛生の他、人畜共通感染症などの対策において、専門知識と広範な実践的技術を有する専門技術者養成が大いに期待されます。また、本専攻を基盤とした博士課程の平成18年度の設立を目指し、学部及び大学院の改組についても検討しているところです。同窓の皆様の変わらぬご支援とご協力をお願い致します。

「変わる大学図書館」

図書館長　長澤　秀行（S53 獣医）

大学図書館の役割には、基本的に学術情報基盤の整備、人材育成、社会貢献の3つがあります。1つ目の学術情報基盤に関しては、近年、電子ジャーナルの利用が急激に増加していますが、蔵書としての学術資料の充実も図る必要があります。2つ目の人材育成については、利用する学生に対して、専門知識に関する学術情報提供にとどまらず、社会への適応力や国際化への対応など、人間形成という大学の重要な部分においても、図書館の果たすべき役割としてその機能が求められています。3つ目の社会貢献に関しては、大学の情報を社会に還元する役割が大学図書館に要求され、大学が所有する豊富な蔵書や学術情報を地域住民の生涯学習に活用していただくのも大学図書館の目的とされています。

本年4月に国立大学法人帯広畜産大学となった本学の図書館は、まず、事務組織が変わりました。附属図書館事務部として独立していたものが、事務局学術情報課として改組されました。八重樫伸男課長をはじめ、小林政和課長補佐、玉沢一隆情報管理係長、窪田恭子専門職員、菅生高章専門職員、清水夫美子専門職員、大平依理子専門職員、柳澤秀博主任、中島司典主任などの人たちがサービス拡大に精力的に取り組んでいます。また、情報処理センターの事務も統合されました。担当は大西明美主任です。

サービス面においては、開館時間を平日8時30分から夜9時（試験期間は夜10時）まで、土曜日およ

び日曜日は9時30分から午後5時30分までと、利用時間を延長しました。また、従来から一般市民に対して閲覧・貸し出し等のサービスはおこなっていましたが、本年7月1日からは、学外者に対する他大学図書館等からの文献複写と資料の借用サービスを開始しました。図書館の予算が限られている中、蔵書数の拡大、資格・試験資料コーナーや高校教科書コーナーの設置充実、視聴覚資料の充実、情報検索システムの整備など、これらは法人化とは無関係ですが、効率化を図りながら「変わる大学」の先頭を走っています。

法人化を機に本学の図書館が学術研究教育の支援と促進の場として、また、学術情報発信の基地として、今後益々サービス向上に努めたいと思います。

新生なる帯広畜産大学における獣医学科

獣医学科長　西村　昌数（S44　獣医）

平成16年度より獣医学科の代表をさせていただいております。何かと戸惑うことが多いこの頃ですが、学科の各位のご助力のお陰で役務を果たしております。

本稿に登場する「獣医学科」について、先ず説明いたします。時代の趨勢で、本学では獣医学教育を行なうに当たり、多様な組織でこれに対応しております。したがって、獣医学科の意味するところは獣医学教育者集団とでも表現することが正しいと思います。

ご承知のように、獣医学教育はこの度大変身を遂げようとしています。教育に当たるということは、決して教員組織の増大化や高品質化だけではなく、受益者である学生達の勉学意欲の高揚も重要だと思うのですが、先ずはシステムの再構築から始めようとしています。現在のところ、その規模と到達目標についての公式な見解は見えておりません。しかし、どのような規模や到達目標となりましょうとも、私たちが獣医学教育を全うするためには、総ての必要に対応しなければならないと思います。このため、本学では獣医学教育の完遂をめざして体制改革を実施しているところです。

その中にあって、旧来の小講座制を脱皮して大講座制となしたことはすでにご承知のことです。したがって、獣医学科としては、基礎獣医学講座、病態獣医学講座、応用獣医学講座、および臨床獣医学講座で構成されており、これに家畜病院で臨床の実践教育を行い、さらに大動物特殊疾病研究センターにて伝達性の特殊疾病は元より病気を見つける巡回診療まで、加えて原虫病研究センターにて感染症から免疫学に至る範囲をカバーしております。このような教育体制を構築しておりますので、旧来の小講座制にありました研究室的な学生の専修教育体制の良さがややもすると失われる危惧を抱いております。また教員の補充に当たっては大綱化を目指し、多重する教員機能を整理して不足の機能を補うべく教員の補充に当たっているところです。

そのような生まれ出ずる悩みに没頭する本学科ですが、ご同窓の各位におかれましては、なお一層のご理解とご支援を賜れますようお願い申し上げます。

畜産科学科

畜産科学科長　荒井　威吉

本年4月から国立大学が法人化され、国立大学法人に移行されました。大学の運営主体が各大学法人になりましたので、独自の個性と特色のある研究教育を行うことが求められています。各大学は今後6年間の中期目標を掲げ、大学の経営、教育環境の整備、教育研究の質的向上、地域貢献、国際交流などの実現に向けて努力することになります。

本学では平成14年度から研究と教育の組織を分離し、他大学に比類のない独自の特色ある教育研究体制を組んでいます。従来の研究室の多くは大講座制になったあとも、研究グループを組んで活動してきましたが、最近では各先生がそれぞれ独立して活動する傾向が強くなっています。また畜産科学科には9教育ユニットがあり、学生は希望する分野の教育を受けることになります。本学は学生を主人公とする教育を行うことを基本として、農畜産を体験的に学習する全学農畜産実習や学生による授業評価などを取り入れており、卒論研究も学生が研究室に所属せず、希望する先生の指導を受けて行うことになります。

本年度から大学院畜産学専攻科に独立専攻として「畜産衛生学専攻」が設置されました。本専攻は獣医学と畜産学を融合させた分野で、本学の特徴を生かした畜産衛生学分野の高度専門職業人を養成する

ことを目的としています。本専攻は、学部教育とは直接の関係をもたない独立した研究組織の位置づけで、入学対象は学部学生のみでなく、広く社会人や外国人留学生などに大学院教育の門戸を開いていることが特徴です。今後は本独立専攻を核とする本学独自の大学院博士課程の設置が重要な要望になってきます。また獣医学教育の充実は全国的な課題ですが、本学でも近々にその体制が整えられていくものと思われます。

同窓生各位には熱い思いをお寄せいただき、本学の長きにわたる悲願である大学院の設置と、国際的レベルでの研究教育のさらなる発展にご支持をいただければ幸いです。

原虫病研究センター：この１年間

原虫病研究センター長　五十嵐　郁男（S52 獣医）

原虫病研究センターは全国共同利用施設になり、4年目を迎えました。また、「21 世紀 COE プログラム」も３年目に入りました。研究の方は、原虫のゲノムプロジェクト、新しい概念である自殺原虫ワクチンの基礎研究、感染免疫機構の解明、ベクターの免疫機構や生理活性物質、新しい診断法や薬剤の開発など従来の研究方針に従って、順調に進んでおります。これらは「21 世紀 COE プログラム」の中核を成しており、獣医学科、大動物特殊疾病研究センター、畜産科学科との協力で順調に運営され、本学の目標であります「食の安全・安心」に関する教育研究に少しでも貢献できればと思っています。その一環として、平成 16 年 4 月 24 日に、帯広畜産大学 21 世紀 COE シンポジウム「動物たんぱく質資源脅かす原虫病と食の安全」を開催しました。本学 OB で前厚生労働省東京検疫所長の森田邦雄先生に「食の安全・安全を正しく理解するために」と題して特別講演をして頂きました。また、原虫病、食品媒介感染症、家畜衛生の各研究グループがわかりやすく、研究内容を紹介したところ、土曜日の午後にもかかわらず 350 人以上の学生、教職員、高校生、一般市民の方に参加して頂きました。また、食の安全に関する人材育成を目的として修士課程「畜産衛生学」独立専攻が 16 年 4 月よりスタートし、本研究センターも人獣共通講座を担当する協力講座として参画し、関連の講義実習を担当しております。16 年 4 月から本学も国立大学法人としてスタートし、大学の自主性が一層拡大されることにより、魅力ある個性輝く大学に発展することが求められております。一方、今後国からの財政的支援が毎年一定の割合で減らされ、外部からの研究資金の獲得が大きな課題となっています。本研究センターも、学術振興会の科学研究費、生研機構、科学技術振興事業団からの研究資金を獲得しています。この１年間、原虫病研究センターの教職員、学生の皆様のご理解とご協力を得ながら、何とかセンター長として、あるいは拠点リーダーとしての重責を果たすことが出来ました。今後とも、獣医・畜産系の大学で唯一の全国共同利用施設である原虫病研究センターが、更に発展するよう、同窓生の皆様のより一層のご理解とお支援をお願いします。

地域共同研究センター

センター長　岡本　明治（S44　草地）

本学は４月から国立大学法人になり大学運営にあたっては自主、自立、自己責任を重視し、広く社会に必要とされる存在であり続ける必要があります。

大学の役割のひとつに地域貢献があります。ここでは、大学が如何に地域社会に役立っているか、役立つ存在になろうとしているか、地域社会は大学を必要としているかということが問われています。この面から学内共同研究施設として設置されている地域共同研究センターは、本学の存続を左右するほど重要な役割を担っています。

スタッフはセンター長の岡本（併任）、専任教員の根本義久助教授（文部科学省からの出向）、産学コーディネーターの田中一郎博士（昭和 41 年本学獣医学科卒業、元（株）エーザイ部長）、十勝財団派遣の飛川コーディネーター、事務員の千枝さん、木幡さんの６名です。

主な業務は以下のようになっていますが、これは大学法人になったことを踏まえています。

1. 企業からの相談窓口、調整、管理
2. 共同研究の受付、調整、進行管理、契約締結の手続き
3. 各種イベントの企画、調整、実施
4. 地域社会との会議への参加

5. センター内の分析機器の管理、保守
6. 知的財産に関する啓蒙と移転
7. 報道機関との接触

これらの業務の中でも共同研究の推進は重要です。昨年度の共同研究数は85件で一昨年よりも減少しましたが、これは、法人化移行のために年度をまたがった研究契約を結ぶことができなかったことがひとつの原因です。本年度は件数も重視しますが、内容の充実に努力します。

本年度の方針は、①共同研究の量から質への転換により知的財産の構築に努力する。②地域における真のパートナーシップの構築を目指し積極的に事業を展開する。③ニーズの調査分析に基づき、いくつかのプロジェクト研究を構築することです。

また、本年3月には本学初の大学発ベンチャー企業[ニュテックス株式会社]を立ち上げました。この会社は、本学の教員が所持している知的財産、新技術や研究成果物を共同研究により評価して、企業とともに産業創出や新製品につなげます。現在、橋本社長を中心に事業をすすめており、いろいろなプロジェクトを計画中ですが、株式上場、増資の折には皆様方からのご投資をお待ちしております。

さらにセンターでは地元農家や企業を対象に肥料や土壌、食品の成分を有料で分析する事業を始めます。これは、法人化を機に、専門技術やノウハウを広く社会に還元し農家や企業などの事業拡大を支援する目的で始めるものです。核磁気共鳴(MMR)装置など最新の分析機器により新商品開発に不可欠な成分分析を行い地域経済の活性化に役立てようと目論んでおります。

今後とも、大学の営業部であります地域共同研究センターへのご理解、ご支援をお願いいたします。

なぜ畜産フィールド科学センターは牛乳製造・販売に取り組むのか？

畜産フィールド科学センター長　左　　久

本年4月1日より本学が国立大学法人になったことで畜産フィールド科学センターがどう変わったかとみますと、畜産学部附属の畜産フィールド科学センターから学内共同利用施設の一つになったこと以外に変化はありません。元々、大学の教育と研究に特徴をつける組織として学内の多くの方々に利用してもらうのが使命であると認識しておりましたので、名実共にその役割を果たしたいと思います。

昨年10月から開始した畜産大学牛乳の学外販売も軌道に乗って現在は順調に推移し、週に2,500本の1ℓパック牛乳を製造・販売しています。関係者のご尽力により昨年末に低温殺菌牛乳製造設備が新たに導入され、現在低温殺菌牛乳を試験製造中です。もうすぐ500mℓパック詰めの63℃30分殺菌の畜産大学牛乳が学内生協の店頭に並びます。低温殺菌牛乳には高温殺菌牛乳には無い豊かな風味とまろやかな味と舌触りがあります。その良さを判って貰うことも今回の学内販売の大事な目的のひとつです。牛乳の味や風味に対する好みは人それぞれが違う原体験を持っていて、馴染んできた味と風味が一番よいと思っている人が殆どです。低温殺菌牛乳が今までのとは違うことは判っても、その方が好いと思うかどうかは別なのです。低温殺菌牛乳は賞味期限が5日で高温殺菌牛乳の7･8日よりも短く、そのため価格も高めなのが難点ですが、今のところ畜産大学では週に1回製造・販売の予定です。高温殺菌で付いた焦げ臭いカラメル臭とは違った本物の牛乳の風味を知って楽しんで頂きたいものです。何故このようにして牛乳製造・販売に拘っているかといえば、法人化により収益を上げることが重要になったからと思われていますが、それよりもっと大事な理由があります。それは、市販できる質と量の牛乳を生産できる本物の農場を使っての実習教育や研究ができることこそが「畜産大学ならでは」の特徴だと考えているからなのです。

センターの大学開放事業への取り組みも年々新たな企画が生まれ、今年は乗馬体験講習が加わり、小学生･中学生、修学旅行の高校生まで対象はますます拡大しています。

同窓会会員の皆様には、より活発で充実した畜産フィールド科学センターに向けてのご助言・ご支援をお願い致します。

大動物特殊疾病研究センター

センター長　牧野　壮一（S54 獣医）

本センターは、大動物特殊疾病の診断・治療・予防法の開発に関する基礎研究と応用研究を行い、家

畜衛生の向上と食の安全性の確保に貢献することを目的とし、2002年8月1日に学内措置として設立されました。原虫病研究センターより助教授2名、獣医学科より助教授1名、畜産科学科より教授2名、助教授2名の合計7名により発足しましたが、2003年度の文部科学省の予算措置により教授3名、助教授4名体制となり、2004年の独立法人化に伴い正式な学内共同施設として活動を開始しています。センターの名称が非常にわかりづらいという声を聞きますが、英文名である“Research Center for Animal Hygiene and Food Safety”なら本センターの設立意図が理解できると思います。この数年大腸菌O157、BSE、炭疽菌、鳥インフルエンザなど、食の安全を脅かす様々な事件が続いて起き、畜産業界には少なからず打撃を与えてきました。帯広畜産大学は我が国の食料・酪農基地である十勝に位置することから、本学は食の安全・安心の確保を目標として長期計画を作りました。そのような点が認められ、本学は文部科学省より21世紀COEプログラムの一つに採択され、さらに本年より食の安全確保の専門家を養成するために畜産衛生学専攻（独立専攻）を立ち上げました。本センターは、それらの協力講座の中心の一つとして活動しています。本センターは、まだ活動拠点となる研究施設は無く、大学の一部を借りて活動していますが、教育面では獣医学科と独立専攻に協力し、研究面では岐阜大学大学院連合獣医学研究科の構成員として大学の長期計画の一端を担い、家畜衛生の向上を目指し励んでいます。本センターは学内外での認知度もまだ低く、微妙な問題を多々含んでいますが、食品・家畜衛生の拠点施設として確固たる地位を得ることができるよう日々精進したいと思っています。本年4月より特定疾病分野に動物衛生研究所より今井邦俊教授が赴任され、現在同分野の助教授を公募中で、後期からは全てのセンター員が揃い、フル活動を始めようとしています。現在本センターは4分野から成っています。

1. 大動物臨床分野：基礎研究により開発された診断・治療・予防法の臨床応用試験及び疫学調査による大動物特殊疾病の汚染状況の把握を目的としています。家畜の生産病や乳房炎の予防システムの構築が主研究課題です。
2. 薬効治療分野：特定感染症の新たな治療法や新規ワクチンの開発により家畜衛生の向上をはかるとともに、食品汚染微生物のリスクアセスメントの実施や細菌性毒素の不活化法の開発による食の安全性確保に貢献します。
3. 特定疾病分野：新興感染症あるいは再興感染症で、特に畜産領域で重要視される感染症や人畜共通感染症を研究し、これらの感染症の発生要因、予防・治療法の開発、発症機構の研究を通して、家畜衛生や畜産物の安全性確保に貢献します。学内のBSE検査の中心になっています。
4. 食品有害微生物分野：食品、特に畜産食品を介して蔓延する感染症の発生要因・予防・治療法の開発、発症機構の研究を通して、家畜衛生や畜産物の安全性確保に貢献します。炭疽菌やリステリアなどの感染予防や発症機構を研究課題としています。

附属家畜病院の近況

附属家畜病院長　宮原　和郎（S53　獣医）

平成16年4月1日からの国立大学法人化に伴い、附属家畜病院には国立大学法人帯広畜産大学畜産学部附属家畜病院規程が施行され、附属家畜病院運営委員会が設置されました。この委員会では、1) 附属家畜病院の管理及び運営の基本方針に関すること。2) 附属家畜病院が行う事業の計画及び実施に関すること。3) 病院長候補者の推薦に関すること。4) その他附属家畜病院の運営に関する必要事項について審議・決定されることになり、運営委員の構成は病院長（宮原）、附属家畜病院の専任教員（石川潤助教授）、大動物特殊疾病研究センター長（牧野壮一教授）、獣医学科臨床獣医学講座主任（山田明夫教授）、研究国際課長（中田敏宣課長）、その他病院長が必要と認めた者（学外の者を含む）若干人となっており、現在その他病院長が必要と認めた者については十勝獣医師会長（大星建治教授）にお願いしています。新しく施行・実施されたこの規定においても目的として「附属家畜病院は獣医学の研究及び教授の目的をもって家畜の診療を行う」ことが明記されています。なお、家畜病院診療の円滑運営のために従来から開催されてきた家畜病院打ち合わせ会議（家畜病院専任教員、臨床獣医学講座所属教員、大動物特殊疾病研究センター診療担当教員、研究国際課研究支援係長）については引き続き毎月1回開催されています。

家畜病院の診療状況については、平成15年度の総診療収入は33,365,750円で前年比約15%の増加となっています。総診療頭数は3,642頭で、このうち牛が1,015頭、馬が199頭と大動物が多いのが本学の特徴ですが、牛の診療頭数には繁殖検診やプロファイルテストなどの集団検診による頭数割合が増加してきています。

家畜病院を利用した教育としては従来選択科目と

して行われていたポリクリ的な科目が、平成14年度入学生が4年生となる明年には廃止され、臨床教育の充実を目的に必修科目である総合臨床実習1、2、3としてスタートすることから、前述の如く教育実習の中心施設としての目的を果たすためにも施設設備と人的な充実を検討中です。

大学の動向と同窓会について

畜産大学同窓十勝会会長　大石　和也 (S33　総農)

平成16年度も4月から新しい年度になり、帯広畜産大学もいよいよ大きく変貌いたしました。ここに「国立大学法人帯広畜産大学」として正式に発足したのです。

ここ近年の間は、独立行政法人に向けて、学長を始めとして各先生方の学内整備などは大変な苦労があったろうと思われます。

いずれにしましても、国立大学法人法にもとずき、この4月からは法人として出発することになったのですが、これに先立ち昨年、鈴木直義学長から同窓会ならびに同窓生にメッセージがありました。それは学長の大学に対する理念と大学の近況報告からなっております。

大学の理念としては二つあり、食の安全と安心を大前提として、その1つは本学を「生命科学COE拠点大学」の一環として、研究成果と人材育成により国際社会から認められる＜畜産専門店大学＞として前進したい。第二点は、大学改革や少子高齢化など社会情勢の変化に対応し、「社会に本学の存在意義を示し、社会の理解をえられる＜社学連携＞の大学」として、まず自前の博士課程の設置と修士課程整備の基盤構想に努力して参りたい。以上が学長の理念であり、以下大学の近況が報告されている。

1. 本学は「人類の動植物生産と安全に基本をおいた」生産から環境及び食品衛生までの一連の＜教育と研究＞を修した者を社会に専門技術者として送り出している。
2. 本学は長期目標として、農畜産物の生産性の向上と食品安全衛生監視を特化し、アジア唯一の「畜産大学大学院重点化単科大学」として発展充実するよう努力している。
3. 本学は文部科学省が2002年10月に新設した「生命科学研究拠点(COE)組織」として、全国26機関の一つに採択されている。内容項目は「動物性蛋白資源の生産性向上と食の安全確保」、「原虫病研究を中心としての研究プログラム」などである。

上記3点は文部科学省が、研究予算を重点配分するために下記の二項目を設定した。

Ⅰ．国内の大学院博士課程を有する大学の中で、世界のトップレベル大学に伍して専門学術研究教育水準が勝る大学づくり。

Ⅱ．本学は長期到達目標に近づくために、文部科学省が期待する、全国共同利用施設として、「原虫病研究センター」を中心核とする。

この中心核を充実、発展させるものとして、学内に「地域共同研究センター」、「畜産科学フィルド科学センター」及び「獣医、畜産科学科の教官協力体制」を配備して、目標達成のため進んでいる。

以上が鈴木学長の報告であり、これを受けて、同窓会も「開かれた大学」として発展し充実のために尽力すべきとの方向が示された。

幸いにも地元、帯広、十勝を中心として組織されている、「帯広畜産大学整備充実促進期成会」や「帯広畜産大学後援会」が強力な支援活動をしてくださっている。

今後はこれらの組織や個人と強く連携してゆく必要がある。

最後に同窓会は今後、いろいろな機会に法人となった大学の発展のために、一人でも多くの人が活動のための資金づくりに努める必要があると思われる。

手始めに個人会費として後援会に参加して活動してみては如何なものだろうか。

帯広畜産大学同窓会オホーツク支部設立の経過について

オホーツク支部長　坂井　清治（S33　獣医）

国内外において、激動の日々が過ぎて行きますが、同窓生の皆様方には、ご壮健でお過ごしのことと拝察し、お慶び申し上げます。

同窓会事務局より、支部の近況などをお知らせ願いたいと依頼がありましたので、支部設立の経過などについてご報告いたしたいと思います。

網走管内には、畜産大学の卒業生は大変たくさん居ります。その為同窓会については、各町村ごとで開催したり、あるいは学科ごとに相集い同窓会を開催しておりました。

管内一本の同窓会の開催については、10年ほど前に何人か集まり開催いたしましたが、規約なども無く正式なものではありませんでした。

2年ほど前、道の自然環境審議会の折、委員として出席されておられた、33年総農卒で元池田町長の大石さんより「何とか網走管内の同窓会を設立して欲しい」旨のお話がありました。

又その後、32年総農卒の小島東藻琴村長さんや、42年獣医卒の掘佐久間町長さんからも同様なお話を受けました。

とりあえず何人かの名簿を作り、形だけでも支部を設立しようかとも話し合いましたが、設立するのならば時間が掛かっても正式に総会を開催し、発足することにしました。

私もまだ勤務しておりますので、暇を見つけながら手元にありました平成10年度版の同窓会名簿を、一頁一頁めくりながら支部会員名簿を作成するのに相当な時間を要しました。

320名の同窓生に案内を差し上げましたが、40通は不在で戻ってまいりました。

9月6日、北見市民会館で45名の同窓生の参加を得て、小島東藻琴村長が発起人を代表して挨拶し、掘佐久間町長を議長にして設立総会を開催いたしました。

大学より鈴木学長、同窓会より高田会長のご臨席を頂き、大学の近況などのお話を聞き、その後、会則の制定と役員を決定し、ここに「オホーツク支部」が発足いたしました。支部名についても「北見支部」ではなく「オホーツク支部」にすることの了解を得ました。

役員については、設立の行き掛かり上から、事務局長兼務の会長に私坂井(33年獣医卒)が、副会長には小島・堀の両村町長にお願いし、会計には38年獣医卒の三宮さんにお願いいたしました。

まだ立ち上がったばかりで、一歩も踏み出しておりませんが、これから歩み始めたいと思いますので、皆様方のご協力、ご指導をよろしくお願いいたします。

帯広畜産大学同窓会道南支部

支部長　淺利　俊吉（S23　酪農）

当支部は渡島・檜山両支庁管内市町村在住者を会員とする。平成14年度末の会員総数は86名で、函館市内43名、総数の半分を占める。続いて渡島南部（七飯・大野・上磯）20名、渡島北部（今金・八雲・森・砂原）19名、檜山（江差・乙部・上の国）4名と広域に居住し、職域も多岐で会員情報が把握しにくい。

本年「喜寿」となった小生、支部長ポスは「棺桶の順」によると、数年前にまつりあげられて支部のシャッポにされて以来、総会で開会の挨拶をするだけで一向に支部活動の活発化に役立っていない。

毎年1回、総会・懇親会を湯の川のホテルで催し旧交を温め情報を交換するのが唯一の活動になっている。全会員の約四分の一、20名前後が参加してくれるが、高校の同窓会などとも同様で、新人の参加はほとんど無く、常連の年寄りが集る傾向が強い。「同窓を懐かしむ心境」になるには卒業後相当長い年月を必要とするものとは思われるのだが、このままでは先細りが思いやられる。

顧みて、当支部の歴史は古い。昭和22年卒業の4期生まではみな獣医師であったから、新年早々に函館市内で開かれる道南獣医師会に集まった同窓生の二次会から自然発生的に組織され、当時献身的なお世話をしてくれた獣医科5期生の故鈴木康雄君を始めとする函館市役所の在勤者が事務局を担当してくれて今日に至っている。

昭和20年代前半の頃の同窓生は少なく、互いに切磋琢磨、相互研修に協力援助しあう雰囲気が横溢していたことが懐かしまれる。また、青函航路があった時期には往復の連絡船乗り継ぎの間を利用して、何度か小西辰雄・中村洋吉先生らが、また元学長の小華和忠士・大原久友両先生が獣医師大会や飼料作物栽培協議会審査でご来函の折りなど、多くの先生が色々な機会を通して支部会員の消息を尋ね、指導、激励のお声をおかけ下さったこと、更に広島大学を経て当市の北大水産学部においでになった細菌学の坂井　稔先生は旧専時代の同窓生には身近な誠に心強い存在であったことなどを有難く誠に懐かしく想起する。連絡船がなくなり函館上空は数分で飛び越えられる飛行機の世の中になったら、人間関係は疎遠になってしまうのかなと僻んだ考えをするのはボケてきた証拠でありましょう。

本部役員並びに各支部会員緒彦の益々のご多祥をお祈り申し上げ、当地ご通過の折にはご一報下さるようお願いいたします。

帯広畜産大学関東同窓会の近況

関東同窓会会長　田中　正三（S31　獣医）

本年度の関東同窓会総会及び懇親会は、6月19日例年通り東京・銀座ライオン7丁目店で70名の参加を得て盛大に行われました。総会に先立ち、当同窓会の発展にご尽力され、去る4月に急逝された当会顧問秋山正文様（S18V）及び5月に急逝された当会前常任幹事中島三雄様（S32V）のご冥福を祈って全員で黙祷をささげた。会長挨拶後議事に移り、前年度事業および決算報告、会計監査報告が承認され、つづいて平成16年度の事業及び予算案並びに役員改選案が上程され、全て異議無く原案通り承認・可決された。特に、役員の改選については、3月の幹事会において話し合った所、若干名の常任幹事を補充するほか現

役員がもう一期留任して、会の充実発展を図ることとされたものであります。

引き続いて懇親会に移り、来賓として本年4月1日より「国立大学法人帯広畜産大学」として新しく出発した母校の鈴木直義学長にご出席いただいて、予めお送りいただいた20ページ余の資料をもとに吠学の近況について以下のようなお話しを伺った。

法人化初代学長として、法人化を個性輝く「専門店単科大学」への絶好の機会と受け止め、先に大学自らの責任で立案・作成した中期目標・中期計画及び年次計画に基づき、獣医・農畜産学融合分野における、世界レベルの中核的拠点構築に向けて全学が一丸となって推進していく決意を表明された。

大学運営・経営を円滑に行うための意思疎通と活性化を図る場として、「部局長会議」の設置、地域貢献組織としての地域共同研究センターに加えて生涯学習関係事業推進のための「地域貢献推進室」や「広報室」を設置する等、社会の変化や学術の進展に適切に対応して、更なる発展を実現していく為不断の努力を払っている。地域社会、関係業界、並びに同窓の皆様のご支援とご指導を切にお願いしたい、と挨拶された。

今回の法人化に際して教育・研究面での特筆すべき改革として、本年4月から大学院「畜産衛生学専攻」コースが開設されたことがあります。このことは、従来畜産学と獣医学との境界領域にあって、必ずしも十分・的確な教育の場が確保されて無かった「食品衛生、人畜共通感染症獣医公衆衛生」に関連した分野を重点的かつ総合的に教育・研究し、今最も社会的要請の強い「食の安全・安心」に的確に応えうる専門家の養成を図り、2年後には大学院博士課程の設置を図るもので、全国に先駆け文字通り自前の一貫した獣医畜産融合分野の専門単科大学構想の実現に向けて力強く踏み出したと言えましょう。従来の縦割り的専門分野や社会の規制・制度の中で今後乗り越えるべき壁も高いと思われますが、社会の要請に応えて果敢に挑んで行くその勇気と熱意に心から敬意を表しますとともに、その成功を強くご期待申し上げます。

さて、会員以外の出席者はお二人で、元教官の田島重雄先生と同じく鈴木蓮夫先生です。田島先生は、帯広畜産大学創立時初代学長であった故宮脇富博士の酪農界発展に尽くされたご功績を讃える顕彰碑が、郷里の島根県太田市鳥井町鳥越の設我等境内に設立され、その除幕式にご出席されたことについて資料をもとにご報告下さいました。また、鈴木先生は現在職業能力開発総合大学名誉教授で、それぞれ当時の教え子に囲まれて歓談の時を楽しんでおられました。

当会も、高齢化が進み、徐々に先輩諸兄の出席が少なくなりつつありさびしいことです。その分若い方々特に女性の方々が積極的に参加されるように考えていきたいと思っています。

帯広畜産大学同窓会大阪支部
母校の創設者宮脇富先生の顕彰碑除幕式に参列して

平成16年5月30日　島根県大田市鳥井町鳥越

大阪支部会長　金谷　一夫

先生は「酪農学は実社会を離れての研究や講義は無意味である」との信念を生涯貫かれた。そして酪農学は、農学の一部であり農学の原理原則に従わないで酪農学は成立しない。農業の根本は土地である。土地は動植物の源泉であり、母体である。その母体は、常に健全に保たれなければならない。健全な土地の涵養のためには、酪農が有効な手段であり、処女地の多い北海道開発のためにも、日本農業の健全な発展のためにも、酪農の振興が不可欠であることを力説された。また「酪農生産物は、人類の健康を保持し栄養を保つ上に最も大切なものであり、その知識を一般社会に普することが酪農振興の根本である」との立場で、農村婦人の教育活動にも専念された。

先生は1968年4月3日病状重く入院された。各界の方々から惜しまれつつ5月29日逝去された。他界されてすでに30年以上の月日を経たとは云え、明治以来、世界と日本の農業、とりわけ酪農の発展に生涯を捧げられた先生は「日本酪農学の創始者」と呼ぶにふさわしい大先生であった。

畜産大学出席者

田島重雄先生	東京都町田市
森本吉郎先生	米子市
新宮安雄町長	玉造玉湯町
清水清氏	愛知県知多郡
久保田政夫氏	島根県浜田町
大原洋一氏	帯広市
金谷一夫	大阪市西区立売堀

島根県支部便り

-宮脇　富農学博士(帯広畜産大学初代学長)顕彰碑建立-

島根県支部事務局長　川津　章弘（S60　生産）

一昨日、山陰地方にも梅雨入りの便りが告げられました。

普段でも雨の多い山陰地方ですが、今日は早朝から大粒の雨が降っています。本日、5月30日は、帯広畜産大学初代学長である宮脇富農学博士の顕彰碑除幕式が、博士の生家である島根県大田市鳥井町で執り行われる日です。

雨の中式の準備を開始したところ、朝から降り続いた雨も除幕式が始まる10時過ぎにはあがり、まるで博士のご功績を讃えるかの如く空が明るく広がる中、博士のご親戚の皆様方を始め、畜産大学関係者、ロータリークラブ関係者、地元自治会の方々、総勢120名が見守る中で顕彰碑の除幕が行われました。

式典では、大原洋一先生の祝辞のなかで、鈴木学長からのメッセージが伝えられ、田島重雄名誉教授からは、宮脇博士の人となりが紹介され、博士のご功績がより鮮明にご参集の皆様方に伝えられました。

この顕彰碑の建立にあたっては、帯広畜産大学同窓会島根県支部も平成15年夏の計画当初から発起人会の一員として参画し、顕彰碑建立の準備に携わってきましたが、帯広畜産大学同窓会の各県支部並びに全国の会員の皆様方に多大なご支援をいただき、本日の除幕式を迎えることができましたことを、心からお礼申し上げます。

また、顕彰碑の碑文は、帯広畜産大学同窓会島根県支部長の乗本吉郎氏の出筆で、宮脇博士のご功績を如実に表現したものとなっています。島根県にご来県の際には、是非お立ち寄り下さいませ。お待ちしております。

最後に支部の活動についてですが、島根県支部は、昭和20年卒業の大先輩から平成13年卒業の金の卵まで、幅広い年代の同窓生わずか20名の少数ながら、毎年1回の総会を開催し、親交を深めております。併せて、隣県の鳥取県、広島県支部の皆様とも持ち回りで合同同窓会を持つなどして活動していますので、今後ともよろしくお願いします。

帯広畜産大学同窓会九州支部の近況

九州支部長　深田　泰三（S30　酪農）

帯広畜産大学同窓会九州支部は、毎年11月の最終土曜日に九州・沖縄のどこかで同窓会を開催し、楽しい時間をすごしています。

思い出しますと、1968年福岡市周辺に住んでいる卒業生に声をかけ、始めたのが最初でした。以来、はや40年近くの年月がたち、数名からスタートしたのが現在130余名（2003年3月支部事務局調べ）になりました。年とともに卒業生が増えるのは当たり前のことですが、各県の卒業生や事務局の尽力により新しい卒業生の動静を把握していただいていることに、感謝するとともに、このことが同窓会の底力と大変うれしくおもっております。

支部には、一期生では大分市の篠田広一郎先輩、鹿児島市の迫田隆平先輩が健在です（守田貞龍先輩は昨年死去されました)。各県在住ごとの卒業生数は、福岡33名、佐賀7名、長崎13名、熊本26名、大分12名、宮崎14名、鹿児島10名、沖縄8名。となっています。

昨年は、一昨年の開催地宮崎市に出席の沖縄在住、川島由次氏（昭和37・獣医卒）の提案で沖縄開催となりました。九州本土から、深田はじめ7名そのうち1名は現在、岡山県倉敷市在住の進藤省一郎氏（昭和35・酪農卒）も出席され、沖縄在住7名の計14名でした。沖縄料理と泡盛で大宴会となり畜産大学生時代にタイムスリップし、楽しい時間もあっと言うまもなく過ぎ、再会をきすこととなりました。九州本土7名は、沖縄のグスク（城）めぐりと自然に接し帰途につきました。本年は、熊本在住の家入誠二氏（昭和55・酪農卒）のお世話で熊本県内で開催することに決定しています。

この様に、九州支部は各県持ち回りで同窓会が開催されています。九州支部は卒業生が集まれば、十勝原野で青春を謳歌した私達が日本の南、九州・沖縄の地において、北海道・本州・四国の同窓生に負けず劣らず帯広畜産大学の同胞として、それぞれの分野において活躍されていることを確信するとともに、帯広畜産大学同窓会とともに九州支部が益々の発展と飛躍することを祈念してやみません。

☆☆☆ 事 務 局 便 り ☆☆☆

＜平成 **15** 年度事業報告＞

平成 15 年 10 月 16 日　帯広畜産大学同窓会総会（農協連ビル）
10 月 17 日　3 年次編入学および大学院合格者へ協賛金納入願いを発送
12 月 17 日　学部推薦入学合格者に協賛金納入願いを発送
12 月 17 日　別科推薦入学者に協賛金納入願いを発送
12 月 17 日　畜大便りを各支部へ発送

平成 16 年　2 月　9 日　学部推薦入学、大学院、帰国子女および社会人特別選抜、私費外国人留学生特別選抜合格者へ協賛金納入願いを発送
2 月 14 日　第 1 回役員会・懇親会　ふじもり食堂
2 月 26 日　卒業および修了予定者に終身会費納入願いを配布（名簿）
2 月 28 日　学部前期および別科合格者へ協賛金納入願いを発送
3 月　6 日　学部前期および別科合格者へ協賛金納入願いを発送
3 月 16 日　学部後期合格者へ協賛金納入願いを発送
3 月 20 日　卒業式（同窓会長祝辞）
6 月 25 日　同窓会執行部会（マルチルーム 201 室）
7 月 31 日　役員会・代議員会
9 月　下旬　同窓会報の発送

＜平成 **16** 年度事業計画＞

平成 16 年 10 月　中旬　3 年次編入学および大学院合格者へ協賛金納入願いを発送
12 月　上旬　第 1 回役員会
12 月　中旬　別科推薦入学および学部推薦入学合格者に協賛金納入願いを発送
12 月　上旬　平成16年版同窓会名簿の発送

平成 17 年　2 月　上旬　大学院、帰国子女および社会人特別選抜合格者へ協賛金納入願いを発送
3 月　上旬　学部前期および別科合格者へ協賛金納入願いを発送
3 月　中旬　卒業および修了予定者に終身会費納入願いを配布
3 月 20 日　卒業式（同窓会長祝辞）
3 月　下旬　学部後期合格者へ協賛金納入願いを発送
7 月　下旬　第 2 回役員会代議員会
9 月　中旬　同窓会報の発送
10 月　上旬　総会

☆☆☆ 名簿に関する報告 ☆☆☆

名簿編集委員長　樋口　昭則

1. 名簿作成の進捗状況
   ① 今年は 2 年に一度の名簿作成の年
   ② 昨年 3 月に卒業・修了予定者に住所変更届と会費未納者に振替用紙を配布
   ③ 昨年 5 ～ 8 月に各旧講座にお願いして、卒業生・修了生・旧教官のデータの修正
   ④ 修正データに基づき、同窓会報と住所変更届の発送を印刷会社に依頼
   ⑤ 昨年 9 月卒業・修了生に②と同じ作業
   ⑥ 正月明けに全職員・教員に名簿修正の依頼
   ⑦ 今年 3 月に卒業・修了予定者に住所変更届と会費未納者に振替用紙を配布
   ⑧ 今年 5 ～ 7 月に各旧講座にお願いして、卒業生・修了生・旧教官のデータの修正
   ⑨ 今年 7 月に印刷会社と連絡して、同窓会報と一緒に送る物の確認、料金受取人払いのバーコード・承認番号の手続を取る
   ⑩ 名簿用パソコンの更新

2. 今後の予定
   ① 8 月に名簿の出版案内、振替用紙、協賛広告案内、住所変更届の原稿作成、印刷会社に送付
   ② 8 月に不明者一覧作成、名簿編集委員への依頼
   ③ 9 月に同窓会報と出版案内、振替用紙、協賛広告案内、住所変更届の発送（印刷会社）
   ④ 9・10 月に協賛広告の確認と再依頼
   ⑤ 10 月に現教職員のチェック
   ⑥ 名簿発行 11 月、発送 12 月

3. 課題
   ① 協賛広告の減少
   ② 最近年の卒業者の名簿登録（勤務先、自宅）の減少

4. お知らせ
   ① 名簿登録事項の変更は、ホームページやメール（higuchi@obihiro.ac.jp）、Fax(0155-49-5439) で、常時受け付けています。

平成 14 年度会計報告
帯広畜産大学同窓会平成 14 年度決算報告書

（平成 14 年 10 月 1 日～平成 15 年 9 月 30 日）

[通 常 会 計]

収入の部

項　　目	H14 予算額	H14 決算額	増　　減	備　　考
前年度繰越金	12,863,070	12,863,070	0	平成 13 年度より
名 簿 販 売	1,000,000	780,000	△ 220,000	210 部 ×3,000 円、1×2,000：広告 3 件 148,000 円
協賛金 , 終身会費	4,100,000	3,563,000	△ 537,000	20,000 円 ×173（協賛）（1 名 ×10,000 円） ：×6（終身；1 名 ×10,000 円）：3,000 円（寄付）
雑　収　入	5,000	54,212	49,212	預金利子、寄付など
特別会計より	0	1,849,668	1,849,668	
合　　計	17,968,070	19,109,950	1,141,880	

支出の部

項　　目	H14 予算額	H14 決算額	増　　減	備　　考
印　刷　代	4,500,000	3,804,858	△ 695,142	封筒印刷ほか
大学後援経費	300,000	300,000	0	学術交流支援 20 万円、後援会賛助会費 10 万円
通信、郵送料	1,500,000	971,093	△ 528,907	料金受取人払ほか
人　件　費	400,000	338,200	△ 61,800	名簿整理等のアルバイト代
事　務　費	100,000	293,524	193,524	ソフト開発代、事務用品、コピー代ほか
会　議　費	200,000	179,000	△ 21,000	事務局会議、役員会、総会ほか
交　通　費	100,000	21,000	△ 79,000	役員会会議旅費
役 員 手 当	300,000	280,000	△ 20,000	14 名分
記 念 品 代	0	0	0	在庫あり
協賛金返還	0	20,000	20,000	退学者 1 名
予　備　費	4,448,070	0	△ 4,448,070	14 年度名簿印刷予備費
雑　　費	120,000	44,696	△ 75,304	振込手数料、弔電費
合　　計	11,968,070	6,252,371	△ 5,715,699	次年度へ繰り越し：12,857,579 円

[特 別 会 計]

収入の部

項　　目	H14 予算額	H14 決算額	増　　減	備　　考
前年度繰越金	11,700,000	11,700,000	0	13 年度繰越
利　　子	0	349,668	349,668	養老保険満期利子
合　　計	11,700,000	12,049,668	349,668	

支出の部

項　　目	H14 予算額	H14 決算額	増　　減	備　　考
通常会計へ	0	1,849,668	1,849,668	養老保険及び満期利子
合　　計	0	1,849,668	1,849,668	次年度への繰り越し 10,200,000 円

平成 14 年度監査報告（平成 14 年度 10 月 1 日～平成 15 年度 9 月 30 日）

帯広畜産大学同窓会の上記期間の監査を実施しましたが、適切に処理されている事を認めます。

平成 15 年 10 月 14 日

署　名　石橋 憲一

小野 斉

平成 15 年度会計報告
帯広畜産大学同窓会平成 15 年度中間報告

（平成 15 年 10 月 1 日～平成 16 年 6 月 11 日）

[通 常 会 計]

収入の部

項　　目	H15 予算額	H15 決算額	増　　減	備　　考
前年度繰越金	12,857,579	12,857,579	0	平成 14 年度より
名 簿 販 売	630,000	78,500	△ 551,500	26 部 x3,000 円、1 部 ×3,500
協賛金 , 終身会費	4,500,000	3,572,000	△ 928,000	20,000 円 x173（協賛）：112,000 円（終身）
雑　収　入	5,000	0	△ 5,000	預金利子、寄付など
特別会計から	0	0	0	
合　　計	17,992,579	16,508,079	△ 1,484,500	

支出の部

項　　目	H15 予算額	H15 決算額	増　　減	備　　考
印　刷　代	4,500,000	0	△ 4,500,000	
大学後援経費	300,000	0	△ 300,000	学術交流支援 20 万円、後援会賛助会費 10 万円
通信、郵送料	1,500,000	145,586	△ 1,354,414	料金受取人払ほか
人　件　費	400,000	211,900	△ 188,100	名簿整理等のアルバイト代
事　務　費	100,000	170,238	70,238	ノートパソコン、事務用品、コピー代ほか
会　議　費	200,000	182,257	△ 17,743	事務局会議、役員会、総会ほか
交　通　費	100,000	20,000	△ 80,000	役員会会議旅費
役 員 手 当	300,000	0	△ 300,000	昨年度に払い込み済
記 念 品 代	0	20,790	20,790	36 名分
協賛金返還	0	23,000	23,000	退学者 1 名
予　備　費	4,448,070	0	△ 4,448,070	14 年度名簿印刷予備費
雑　　費	120,000	46,772	△ 73,228	振込手数料、弔電代
合　　計	11,968,070	820,543	△ 11,147,527	

[特 別 会 計]

収入の部

項　　目	H15 予算額	H15 決算額	増　　減	備　　考
前年度繰越金	10,200,000	10,200,000	0	14 年度繰越
利　　子	0	0	0	
合　　計	10,200,000	10,200,000	0	

支出の部

項　　目	H15 予算額	H15 決算額	増　　減	備　　考
通常会計へ	0	1,849,668	1,849,668	養老保険および満期利子
合　　計	0	1,849,668	1,849,668	